

書評 Rusa Novelado. Volumo I: La 19a Jarcento. Kaliningrad, Sezonoj, 2003. 400 p.

この書には 19 世紀ロシア文学の珠玉の散文が選ばれている。プーシキン、レールモントフ、ゴーゴリ、ツルゲーネフ、ドストエフスキイ、サルティコフ＝シチェドリ、トルストイ、チャーホフという巨匠の競演である。原典はロシア語の美しさを存分に生かし、散文のお手本となる資格を備えた作品ばかりであるが、エスペラント訳でもその高貴な香りを失っておらず、それどころか、原文とはまた一味異なる引き締まった表現によって読者に新鮮な感覚を起こさせる。翻訳が原文の影にとどまらず、エスペラント文学として独立した価値の作品ともなっている。また作家一人一人の特徴が、エスペラントを媒介としてよりくっきりとした輪郭で伝えられている。トルストイの文章にはエスペラントでも凝った単語が多用される。プーシキンの簡潔で印象的な言語表現、レールモントフのロマン的な人間と風景の描写、ゴーゴリのくどいおおげさな修飾表現、チャーホフのほろ苦い人生観、シチェドリンの軽妙なかけあいの対話、ツルゲーネフの自然と人間の美しい描写、ドストエフスキイ独特の告白的叙述、などがエスペラントで十分に堪能できる。

しかし文学はまず言語の芸術であるから、原文自体の響きや文体が果たす役割が大きい、ロシア語の音と文体がもつ美を翻訳でどの程度伝えることができるか、その困難な課題に翻訳者がエスペラントという受け皿をいかに活用しているか、が問われる。本書は言葉としてのエスペラントの美とリズムを感じさせ、その満足度は決してロシア語の原文にひけをとらない。エスペラントの文法の簡潔さ、造語機能の豊かさがロシア文学の翻訳でもその効果を発揮し、とにかく読みやすくりズムと響きが美しい。民族語で書かれた傑作をエスペラントのような普遍語に訳す本書のような仕事は、ロシア文学の普遍的価値を紹介するのみならず、エスペラントの語学的豊かさもひきずり出す。ロシア語文法には完了体、不完了体という動詞の区別があり、その使用のしかたで時間感覚がおおいに異なるけれども、その体の区別をもたないエスペラントでどう処理されているか興味をそそられるが、今回の読後感では、障害はまったく感じられなかった。「体」の区別は、あえてそれが形としてなくても、読者が無意識のうちに感じ取るものなのであろう。またもしどうしても必要ならエスペラントでの「体」は接頭辞や接尾辞で十分に表現できる、感じた。

ただ、ロシア文学で少なからず重要な役割をもつ二人称の「vi」と「ci」の区別はこの訳書でほとんど抹消され、(トルストイの『夜会の後』に一部 ci があるが) ほぼ「vi」で統一されている。これは人間関係の遠近や微妙な移り変わりを味わううえで障害が生じる。すくなくとも翻訳においてはこの区別を保存すべきであると思う。またロシア語の慣用表現なども直訳が目立ち、例えば、「かにのように赤くなる」、「布のように青白い」などのロシア語表現をそのまま直訳して「ruĝa kiel kankro(p.204)」「tute pala homo, kvazaŭ littuko (p.195)」としているが、これは原文では音の遊びのだけじゃれ表現「pokrasnel, kak rak」(kr の反復)「blednyj kak polotno」(bldn-pltn の反復)である。

本書は発行部数 500、シリーズであと 2 巻 (20 世紀文学、詩集) 出る予定である。